

# 100年 先を読む

27

## 影絵ではなく実景から パンデミック以後を 想像する

### ▶プラトンの示唆した影絵の比喩

古代ギリシャの哲人プラトンの『国家』という著書に「洞窟の比喩」という内容がある。人々は洞窟の内部で前方の壁面を凝視することしかできない姿勢に拘束され、壁面には人々の背後の社会の様子が影絵で投影され、それが現実の社会と全員が錯覚している。ある1人が外部へ進出する機会があり、最初は太陽の光線がまぶしくて現実を直視できなかったが、次第に現実を理解できるようになり、帰還して洞窟の内部の人々に伝達するが、1人として信用する人間はいなかった。

飛躍するようであるが、現在の新型コロナウイルスが人類にもたらしている効果は、これまで影絵で世界を理解していた人々に現実の世界を実見する機会をもたらしていることである。一部の学者が交通事故の増加、大気汚染の悪化、気温上昇などを警告してきたが、大半の人々は深刻な課題と理解してこなかった。しかしパンデミックの拡大とともに、交通事故は減少、大気汚染は軽減、炭酸ガスの濃度は低下に転換し始め、原因は人間の活動であることを証明してくれた。

このような事態で判明したことは、これまで世界が直面していた社会問題や環境問題は一般に発展とか拡大を前提とした社会構造がもたらしたものであり、その構造がパンデミックの影響で減速し、一部が停止した結果、自然に緩和される方向に転換したことになる。プラトンの啓示を借用すれば、これまで地球規模の問題は壁面の影絵として提示されており、一部の学者などが社会の背後にある現実

に言及しても、それを実感しない社会が加速してきたということになる。

### ▶影絵の裏側にある真実を洞察

人類の歴史は猿人を起点とすれば約600万年であるが、原人、旧人を經由して、現在の人類の直系の祖先とされる新人は約20万年前に出現している。一方、ウイルスは地球に生命が誕生した約38億年前に登場しているが、自身だけで増殖する能力がな



く、他者に寄生する必要がある。人類の登場以前は植物や動物に寄生していたが、登場して以後は人類にも寄生している。実際、7000年前に現在のドイツ一帯に生活していた農民の遺骨からB型肝炎ウイルスが発見されている。

このウイルスも一部とした生物は地球全体が凍結した極寒の時代や隕石衝突の時代などに大量絶滅しているが、それでも現在まで38億年を生存してきた。それは多種多様な生物が相互に密接に依存する生命圏域（バイオスフィア）という構造を構成してきたからである。一例は食物連鎖で、水中の植物プランクトンを動物プランクトンがエサにし、それを小魚、大魚が、さらには陸上の生物がエサとしているように、複雑な関係を構築している。

現在の地球には3000万種程度の生物が棲息していると推定されるが、それらが相互に密接に関係して多様を特徴とした生命圏域を構築してきた。ところが1種だけ異常に繁殖した生物が登場した。人類である。38億年という地球の歴史では一瞬の過去1万年という時間に1000倍以上に増加し、しかも人類全体では10万倍のエネルギーを消費している。その過程では大量の生物を絶滅させている。洞窟の影絵



には投影されない地球環境問題の実景である。

### ▶パンデミック終焉は 千載一遇の機会

ウイルスの病魔の阻止は必要であるが、次々と新種が登場するウイルスの根絶はできないし、万一、根絶すれば多様な生命圏域の一部が毀損され広範に影響する。この生命圏域の上部に構築されているのが経済圏域であるが、そこにも同様の多様の原則が存在する。1丁の豆腐の生産から消費までに、大豆の生産、流通、加工、販売という多様な仕事が存在する。高度な工業製品についても同様であることは、疫病の結果、世界各地で生産や流通が混乱していることでも明快である。

プラトンが喝破したように、政治も経済も文化も大半は複雑な生命圏域や経済圏域を背後から投影した影絵である。すでにテレワークが急速に普及し始め、業態を変革する企業が増加するなどの変化が登場している。今回のパンデミックが収束したとき、情報社会への急速な転向との相互作用により、経済社会が一変する気配がある。

それを影絵で予測するのではなく、その背後にある実景から今後のビジネスを熟考すれば、千載一遇の機会を手中にできることになる。



東京大学名誉教授

つきおよしお  
**月尾嘉男**  
Tsukio Yoshio

昭和17(1942)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に『幸福実感社会への転進』（モロロジー研究所）、「転換日本」（東京大学出版会）ほか多数。